

葡萄水

宮沢賢治

青空文庫

(一)

耕平は髪も角刈りで、おとなのくせに、今日は朝から口笛などを吹いてゐます。

畑の方の手があいて、こゝ二三日は、西の野原へ、葡萄ぶどうをとりに出られるやうになつたからです。

そこで耕平は、うしろのまつ黒戸棚とだなの中から、兵隊の上着を引っぱり出します。

一等卒の上着です。

いつでも野原へ出るときは、きつとこいつを着るのです。

空が光つて青いとき、黄いろなすぢの入つた兵隊服を着て、大手をふつて野原に行くのは、誰だたれつていゝ気持ちです。

耕平だつて、もちろんです。大きげんでのつしのつしと、野原を歩いて参ります。

野原の草もいまではよほど硬くなって、茶いろやけむりの穂を出したり、赤い実をむすんだり、中にはいそがしさうに今年のおしまひの小さな花を開いてゐるものもあります。

耕平は二へんも三べんも、大きく息をつきました。

野原の上の空などは、あんまり青くて、光つてうるんで、却^{かへ}つて気の毒なくらゐです。その気の毒なそらか、すきとほる風か、それともしろの畑のへりに立つて、玉蜀黍^{とうもろこし}のやうな赤髪を、ぱちやぱちやした小さなはだしの子どもか誰か、とにかく斯^かう歌つてゐます。

「馬こは、みんな、居なぐなた。

仔^まつこ馬もみんな随^ついで行^いた。

いまであ野原もさあみしんぢや、

草ばどひでりあめばかり。」

実は耕平もこの歌をききました。ききましたから却^{かへ}つて手を大きく振つて、

「ふん、一向さつぱりさみしぐないんぢや。」と云^いつたのです。

野原はさびしくてもさびしくなくても、とにかく日光は明るくて、野葡萄はよく熟してゐます。そのさまざまな草の中を這^はつて、真^まつ黒に光つて熟してゐます。

そこで耕平は、葡萄をとりはじめました。そして誰でも、野原で一ぺん何かをとりはじめたら、仲々やめはしないものです。ですから耕平もかまはないで置いて、もう大丈夫です。今に晩方また来て見ませう。みなさんもなかなか忙がしいでせうから。

(二)

夕方です。向ふの山は群青ぐんじやういろのごくおとなしい海鼠なまこのやうによこになり、耕平はせなかいっぱい荷物をしよつて、遠くの遠くのあくびのあたりの野原から、だんだん歸つて参ります。しよつてゐるのはみな野葡萄の実にちがひありません。参ります、参ります。日暮れの草をどしやどしやふんで、もうすぐそこに來てゐます。やつて來ました。お早う、お早う。そら、

耕平は、一等卒の服を着て、

野原に行つて、

葡萄ぶどうをいっぱいとつて來た、いゝだらう。

「ふん。あだりまいさ。あだりまいのごとだんぢや。」耕平が云つてゐます。

さうですとも、けだしあたりまへのことです。一日いっぱい葡萄ばかり見て、葡萄ばかりりとつて、葡萄ばかり袋へつめこみながら、それで葡萄がめづらしいと云ふのなら、却かへつて耕平がいけないのです。

(三)

すっかり夜になりました。耕平のうちには黄いろのラムプがぼんやりついて、馬屋では馬もふんふん云つてゐます。

耕平は、さつき頬ほつぺたの光るくらゐご飯を沢山喰べましたので、まったく嬉うれしがって赤くなつて、ふうふう息をつきながら、大きな木鉢きばちへ葡萄のつぶをパチャパチャむしつてゐます。

耕平のおかみさんは、ポツンポツンとむしつてゐます。

耕平の子は、葡萄の房を振りまはしたり、パチャンと投げたりするだけです。何べん叱しかられてもまたやります。

「おゝ、青あゑい青あゑい、見る見る。」なんて云つてゐます。その黒光りの房の中に、ほんの一つか二つ、小さな青いつぶがまじつてゐるのです。

それが半分すきとほり、青くて堅くて、藍晶らんしやうせき石より奇麗です。あつと、これは失礼、青ぶだうさん、ごめんなさい。コンネテクカッタ大学校を、最優等で卒業しながら、まだ

こんなこと私は云つてゐるのですよ。みなさん、私がいけなかったのです。宝石は宝石です。青い葡萄は青い葡萄です。それをくらべたりなんかして全く私がいけないのです。実際コンネテクカット大学校で、私の習つてきたことは、「お前はきよろきよろ、自分と人とをばかりくらべてばかりゐてはならん。」といふことだけです。それで私は卒業したのです。全くどうも私がいけなかったのです。

いや、耕平さん。早く葡萄の粒を、みんな桶をけに入れて、軽く蓋ふたをしておやすみなさい。さよなら。

(四)

あれから丁度、今夜で三日になるのです。

おとなしい耕平のおかみさんが、葡萄のはひつたあの桶を、てかてかの板の間のまん中にひっぱり出しました。

子供はまはりをぴよんぴよんとびます。

耕平は今夜も赤く光つて、熱ほてつてフウフウ息をつきながら、だまって立って見てゐます。

おかみさんは赤漆塗りの鉢あかうるしぬ はちの上に箆ざるを置いて、桶をけの中から半分潰つぶれた葡萄ぶどうの粒を、両手に掬すくって、お握りを作るやうな工合ぐあひにしぼりはじめました。

まつ黒な果汁は、見る見る鉢にたまります。

耕平はじつとしばらく見てゐましたが、いきなり高く叫びました。

「ぢや、今年あ、こいつさ砂糖入れるべな。」

「罰金取らへらんすぢや。」

「うんにや。税務署に見めつけらへれば、罰金取らへる。見めつけらへないば、すつこすつこど葡ぶん葡萄酒どしゆの呑む。」

「なじよして蔵かくして置くあんす。」

「うん。砂糖入れで、すぐに今夜こんにや、瓶びんさ詰めでしむべぢや。そして落しの中き置くべさ。瓶、去年なのな、あつたたちぢやな。」

「瓶はあらんす。」

「そだら砂糖持つてこ。喜助せんあ先せんどな持つて来たけあぢや。」

「あん、あらんす。」

砂糖が来ました。耕平はそれを鉢の汁の中に投げ込んで掻かきまはし、その汁を今度は布

の袋にあげました。袋はぴんとはり切ってまっ赤なので、

「ほう、こいづはまるで牛の胆（べい）きものよだな。」と耕平が云ひました。そのうちにおかみさんは流しでこちこち瓶を洗って持って来ました。

それから二人はせっせと汁を瓶につめて栓（せん）をしました。麦酒瓶（ビールびん）二十本ばかり出来あがりました。「特製御葡萄酒」といふ、去年のはり紙のあるのもあります。このはり紙はこの辺で共同でこしらへたのです。

これをはって売ります。さやう、去年はみんなで四十本ばかりこしらへました。もちろん砂糖は入れませんでした。砂糖を入れると酒になるので、罰金です。その四十本のうち、十本ばかりはほかのうちのやうに、一本三十銭づつで町の者に売ってやりましたが、残りは毎晩耕平が、

「うう、渋、うう、酸つかい。湧（わ）いでるぢやい。」なんて云ひながら、一本づつだんだんのんでしまったのでした。

さて瓶がずらりと板の間にならんで、まるでキラキラします。おかみさんは足もとの板をはづして床下の落しに入って、そこからこつちに顔を出しました。

耕平は、

「さあ、いゝが。落すな。瓶の脚揃えでげ。」なんて云ひながら、それを一本づつ渡しす。

耕平は、潰し葡萄を絞りあげ、

砂糖を加へ、

瓶にたくさん詰めこんだ。

と斯う云ふわけです。

(五)

あれから六日たちました。

向ふの山は雪でまっ白です。

草は黄いろに、をととひなどはみぞれさへちよつと降りました。耕平とおかみさんとは家の前で豆を叩いて居りました。

そのひるすぎの三時頃、西の方には縮れた白い雲がひどく光って、どうも何かしらあぶないことが起りさうでした。そこで

「ボツ」といふ爆発のやうな音が、どこからとなく聞えて来ました。耕平は豆を叩く手をやめました。

「ぢや、今の音聴だが。」

「何だべあんす。」

「きつとどの山が噴火したな。秋田の鳥海山だべが。よつぽど遠ぐの方だよだぢやい。」

「ボツ。」音がまた聞えます。

「はあでな、又やった。きたいだな。」

「ボツ。」

「をおがしな。」

「どこだべあんす。」

「どこでもいがべ。此処^{ここ}まで来ないがべ。」

それからずうつとしばらくたつて、又音がします。

それからしばらくしばらくたつてから、又聞えます。

その西の空の眼^めの痛いほど光る雲か、すきとほる風か、それとも向ふの柏^{かしは}林^{はやし}の中
はひつた小さな黒い影法師か、とにかく誰^{たれ}かが斯う歌ひました。

「をどでな昨日、みいぞれ降つたれば

すゞらの実い、みんな赤くなて、

雪の支度のしろさぎあ、

きいらりきいらど齒あみがぐ。」

ところが

「ボツ。」

音はまだやみません。

耕平はしばらく馬のやうに耳を立てて、じつとその方角を聴いてゐましたが、には俄かに飛びあがりました。

「あつ葡萄酒だ、葡萄酒だ。ぶどうしゅ葡ん葡萄酒はじけでるぢや。」

家の中へ飛び込んで落しの蓋をふたとって見ますと、たしかに二十本の葡萄の瓶は、大抵は
じけて黒い立派な葡萄酒は、落しの底にながれてゐます。

耕平はすっかり怒つて、かるわざの股引のやうに、ももひき半分赤く染まつた大根を引っぱり
出して、いきなり板の間に投げつけます。

さあ、そこでこんどこそは、

耕平が、そつとしまつた葡萄酒は

順序たゞしく

みんなはじけてなくなつた。

と斯^かう云ふわけです。

どうです、今度も耕平はこの前のときのやうに

「ふん、一向さつぱり^{あだ}前あだんぢや。」と云ひますか。云ひはしません。参つたので
す。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：田代信行

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葡萄水

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>